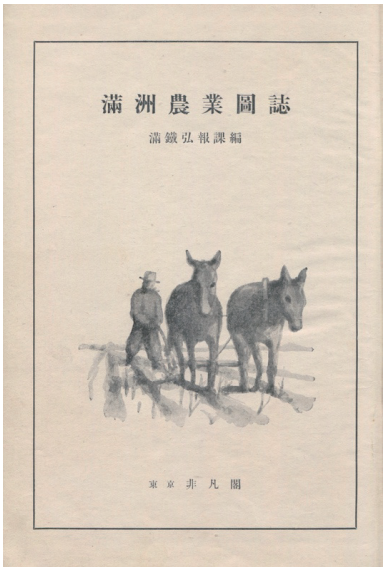
連載　中国絵はがきコレクション紹介 ⑧　非文字資料研究センター所蔵

戦前中国の風俗絵はがきの世界　（近藤恒弘氏　寄贈）

満洲国に於ける農民の生活　其一

孫 安石（非文字資料研究センター　研究員）



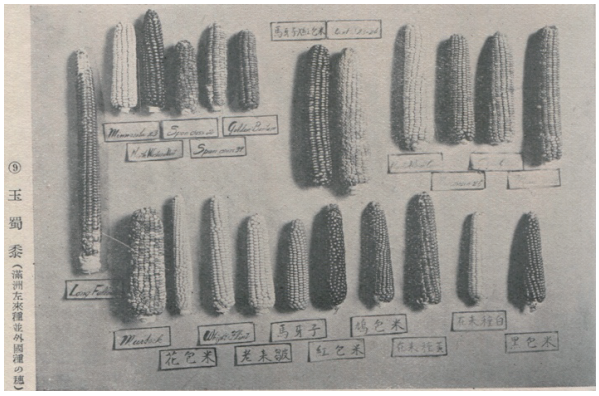
図A　満鉄弘報課編『満洲農業図誌』の表紙

戦前の満洲の農業と農民の生活を「写真」などの非文字資料を使って理解するにおいて大いに役立つ書籍として満鉄弘報課編『満洲農業図誌』（非凡閣、1941 年）がある。

同書は、満洲国建国後の約 10 年を経過した時に、農業を含めた満洲の産業研究に関連する各種の優れた研究書籍の刊行が相次ぐなかで、「本書はその一翼に賛して満洲在来農業の諸面を、写真によって記録し、平面的記述を立体的に捕へんとの目的の下に編纂した。特に、農耕法に重点を置き、農作物、農器具、販売事情、農民の社会生活については、記述によって写真の不足部分を説明した箇所も少くない。」という目的で編纂された（同書の凡例より）。

筆者が同書に注目する理由は、満洲の農業を立体的に理解しようとする手段として写真という非文字の記録を重要視し、また、写真に解説が併記されていることにあるのは、言うまでもないが、同書は写真の来歴についても、満鉄調査部北満経済調査所吉川忠雄氏が農村の実態調査の時に撮影した写真に、満鉄総裁室弘報課、満洲国公主嶺及び克山の農事試験所と興農部、濱江省興農合作社聯合会などが所蔵する写真を加え、さらに新たに写真を補足したと明記しているから、なんと今から 80 年前に満洲の農業分野における非文字資料研究の手法を実践して見せたことによる。

例えば、食糧作物の一つとして、玉蜀黍（トウモロコシ）を取り上げ、その種類は一般に有稃、爆裂、硬粒、馬歯、軟粒、甘味、軟粒甘味の七種類に分類されるが、満洲の在来種は数甚だ多く、品種名の雑然としている、としながら「図　玉蜀黍」を載せて、満洲在来種の穂の種類を記載している。



図B　「玉蜀黍」（右から穂の種類を黒包米、在来白種、在来種黄、鳩包米、紅包米、馬牙子、老来皺の順に記載している。同書、57 頁）

また、整地用器具の耕墾用器具として最も重要な意味を持つ道具として「犁仗」に注目し、その種類は、開墾犁、種犁、蹚犁、小耕犁などの 4 種類に分け、構造はいずれも同様であるが、その大きさからくる用途別によって名称が与えられるとする。

図C　「犁鏵子の種類」（同書、85 頁）

図は犁仗に付属する犁鏵子を、打邊鏵子（図の左、大鏵子の両縁をなくしたもので初期の中耕に使用する）、大鏵子（図の中央、最も普通に用いられるもの）、打耳鏵子（図の右、大鏵子の両縁をなくしたもので中期、後期の中耕に使用されるもので、無耳鏵子、打邊鏵子ともいう）に分け、説明する写真である。

図1　滿洲國に於ける農民の生活　其一

以下、『満洲農業図誌』の記述を紹介しながら満洲の農業と農民の生活について紹介しつつ、絵葉書の「満洲国に於ける農民の生活　其一、其二（46号に掲載予定）」の場面について、若干解説を加えてみることにしたい。（　）の中の数字は同書の頁数を示す。

ところが、ここで紹介する絵葉書「満洲国に於ける農民の生活　其一」は農耕法、農作物、農器具などの農業に直接関連することがらではなく、農村生活に付属する場面を多く取り上げている。まず、多くの絵葉書に登場する衣服であるが、『満洲農業図誌』の「農民の衣食」という項目に次のような記述が見える。

「満洲の農民の衣服類に就て最も注目に値する点は、それが一点の無駄が無く一にも二にも経済的に考案されている点である。先づ衣服の色合であるが、それは黒又は紺、藍色で統一されていることである。時に子供や婦女子の晴着に赤その他の柄物を見るが、平常の服はすべて無地である。布地が黒、紺の無地であると云うことは、父親の衣類がいたんでくれば、母親の着物にもなるし、仕立直せば子供の着物にもなる。（162頁）」

ここの絵葉書で見られる多くの服装は、これらの服装と色合いの記述と合致する。布地は衣服にもなれば靴にもなる。満洲の農民は普通、布で作った皮底の短靴を履くが、丈夫なのは牛や豚の皮一枚で足を包むように作った烏拉靴（Wolaxie）である。この烏拉靴の中に干した烏拉草（学名：Carex meyeriana）を敷けば防寒の機能をさらに高めることができる、という（図4）。

穀物を製粉するには磨（石臼）を用いる。多くの場合、驢馬に曳かせて旋回し、穀物を粉にする。しかし、農家の多くは石臼を持っているわけではないので、精白する時の碾子を以て代用することが多い（165頁）。乾燥した穀物を丁寧に挽けば、粉を得ることができるので、農家では高粱、粟などはもちろん、豆腐や麺類を作ることができる。石臼を曳くのは多くの場合、目隠しされた驢馬が使われるが、時には人が家畜の代わりに曳くこともある（図5）。

穀物の脱穀や運搬、そして露店の商品並びなどには

図2　羊の放牧

図3　水田の灌漑

図4　路傍の靴屋さん

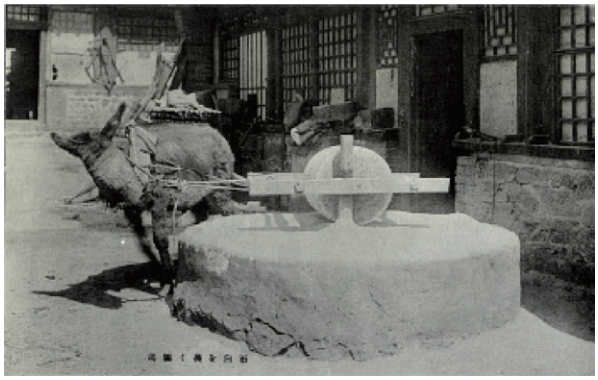


図5　石臼を挽く驢馬

図6　木陰に店を開く老商

図7　駄菓子屋の出店

図8　蹄鐵屋

図9　路傍の瓢箪屋

図10　驢馬の水運び

様々な籠が必要となる。籠の総称として一般的に使われるのは、筐（Kuang）という言葉である。竹、または柳枝で編んだ円形、楕円形の籠で大、小の様々な種類がある。形の大きいものを大筐といい、小形のものは桃筐という。また、取っ手がついているものは手筐ともいう。図６、図７の露店に見える籠は、筐の種類の多さをうかがわせている。

満洲の農業は役畜農業であり、普通の農家では馬、または驢馬が２、３頭養われるのが普通であった。馬小屋は農家の庭（院）にあり、「馬圈」、または「馬柵子」と言われた。馬や驢馬は満洲の農業はもちろん、生活そのものにおいても欠かすことのできない重要な労働力であるので、馬の蹄（ひづめ）を保護するために装着する鉄製の蹄鉄は必須のものであった。蹄鉄の交換は、蹄鉄を外す、蹄を削る、蹄鉄を熱し、形を整え釘を打ち付けて仕上げるという流れになるが、いずれも熟練した手作業が不可欠であるため蹄鉄屋は村には欠かすことのできない職業であった（図８）。

炊事用の井戸は各戸に一個ずつある訳ではないので、飲料水の運搬は、家事のうちの重要な仕事である。とくに冬期の水汲みは女性の労働では手にあまるものがあり、そのときに活躍するのが驢馬による水運びである（図10）。

収穫物の運搬や、穀物の市場販売など農村の運送手段として最も普遍的に利用されるのは「大車」である。大車には車体に大、小があり大車、小車を区別する。また、車輪が放射状のものを花軲轆車と呼び、ゴムの車輪をつけたものを膠皮車と呼ぶ（図 11）。積載荷重は車体の大小、運搬の距離、道路の良し悪し、牽引する家畜の頭数によって異なり、馬や驢馬は１頭から７、８頭まである。満洲の内陸の旅に欠かせないのが、蒲鉾型の客席を設けた一名「蒲鉾馬車」である（図 12）。

満洲農業における女性の労働の参加はあまり多く無いが、南満地方では除草に参加することは割合よく見られるという。男性の除草では柄が長い「鋤」を使用するが、女性は柄の短く目方が軽い「鋤頭」を使用し、腰を落として行うので、効率は悪い。しかし、女性の労働は農業

図11　物思ひに沈む一車輪夫

図12　客待ちの蒲鉾馬車

図13　僧侶の樂しみ

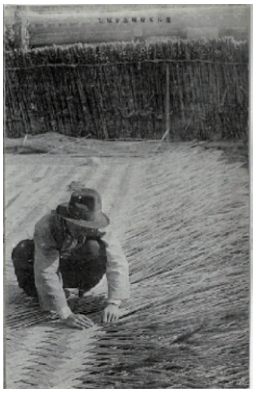


図14　蘆にて屋根蓆を編む

図15　母親は河で洗濯

図16　農民の姉弟

図17　鉢物を乾燥す

の他に育児、洗濯、炊事へと続くので、過酷を極めたと言わなければならない（30 頁）。図 15 は、女性の洗濯の場面を収めたもので、図 16 の女性は余所行きの正装と見える。

日本の農家では木製の樽、桶、箱などの器具が多く製作されるが、満洲の容器は大概は土器で、富裕な農家になるに従って家財道具に金属的なものが多くなったという（160 頁）。炊事用品としても、油物を揚げる鍋物は別として、その他の味噌、漬物、飲料水などを貯える瓶などもすべて土器で作られた。図 17 は、この容器を作り乾かす場面を写したものである。